# 慈照寺中門の復元

研究員　大森彦一／研究員　井上年和

## 1．はじめに

東山慈照寺、通称銀閣寺は臨済宗相国寺派に属し、足利将軍８代目義政が営んだ山荘東山殿を後に寺院に改めたものである。

東山殿は文明十年（1482）に着手され延徳二年（1490）まで工事が継続したが、その間義政はそれらの建築や庭園に自身の好みと工夫を反映させるために熱意を注いだことで知られている。延徳二年に義政が没すると遺命により東山殿を禅院に改め慈照院と称すると共に、土地と建物の全てを引き継ぎ、さらに延徳三年には慈照寺と改めた。

今日寺内に現存する東求堂（文明十七年　1485　国宝）と観音殿（通称銀閣　長享三年1489）、周辺の庭園などは東山殿の名残を今に伝える貴重な遺構として知られている。

その他にも元和・寛永期に再建されたとされる方丈や総門（18世紀中期）等が残る[注1]。

## 2．中門の改築について

改築前の中門はその形式や古図、発掘調査の結果などにより江戸時代後期頃のものと推定される。形式は一間薬医門桟瓦葺としていたが、建物全体に老朽と破損が顕著であった

写真１　解体前中門

ために修理再用は困難と判断し、全面改築することとした。

さて、中門改築計画の策定に際しては、慈照寺が義政公の造営した東山殿を、義政の没後に禅院に改めたものであり、また国の特別名勝・特別史跡に指定された重要な区域であることを踏まえ、初期の境内と中門がどのような状況であったかを把握する必要があった。

このことにより、建築や庭園など各部門における学識経験者や府、市の文化財行政関係者により構成される整備委員会を組織し、中門周辺の発掘調査と並行して古図や文献などの調査を行い、定期的に委員会を開催し、その中で慎重な議論が行われた。あいにく、東山殿や初期の慈照寺にかかる史料を見い出すことは出来なかったが、多くの貴重な成果と知見を知ることが出来た。それらを基本とし、また京都の禅宗寺院のうちから、初期の慈照寺に適合した類例を参考として、何種類かの改築計画を立案した。それらの中から、形式は室町時代の様式に則り、木材は吉野産の天然檜を使用し、屋根は檜皮葺で仕上げることとした。

今回完成した中門の形式は以下のようになる。

一間棟門、切妻造、檜皮葺、円柱、前後控柱、潜戸付

なお、中門周辺の受付や朱印所、改札、高塀などについても各所が老朽や破損が見られたため、中門周辺の整備において全てを改築することとした。

## 3．委員会の構成

| | |
|---|---|
| 整備委員 | 川上貢委員 中村昌生委員 永井規男委員 中村一委員 |
| 京都府 | 杉原和男文化財保護課課長 石田裕二文化財保護課主査 |
| 京都市 | 石崎了文化財保護課課長　玉村登志夫同課係長 |
| | 今江秀史文化財保護課技師 |
| 京都市埋蔵文化財研究所 | 鈴木久男調査課長 |
| 慈照寺 | 有馬頼底住職 坂根孝慈執事長 小出量堂執事 草場周啓執事 |
| | 和泉徹統括課長 北川紀昭会計課長 高山富雄庶務課長 |
| 北村誠工務店 | 清水年男 |
| 建築研究協会 | 西田義雄顧問 藤本春樹研究員 大森彦一研究員 井上年和研究員 |

委員会の経過と協議内容

第１回　平成14年１月29日　中門改築の方針について

第２回　平成14年５月23日　古図等から形態について推察

第３回　平成14年７月29日　仮設参拝通路、各省庁への手続き等について

　　平成14年９月24日　文化庁打ち合わせ

第４回　平成15年５月29日　発掘調査結果の説明及び中門様式の検討

平成15年８月25日　文化庁現場視察

第５回　平成15年９月５日　中門様式の最終決定と周辺建物の整備について

## ４．史　料

慈照寺に関する史料は軸装され慈照寺に什宝として伝えられた文書と、それとは別に収蔵されてきたもの(注2)等がある。その中で御閣（銀閣）、東求堂、庫裏、総門等には改修に関する文書はみられるが、中門について書かれているものはほとんど見あたらない(注3)。

しかし、古図に関しては江戸時代のものが数点存し、慈照寺境内の変遷を知る上で貴重な資料となっている。その中でまとまったものを挙げると、

①文部科学省国文学研究資料館蔵山城国葛野郡嵯峨天龍寺塔頭臨川寺文書の内「東山慈照寺修復許可ニ付大工市左衛門伺状」

元文三年（1738）午四月

境内全体図。建物は単線引。各室名記入。庫裡及び東堂（東求堂）は建物規模が書かれる。客殿（現方丈）の西側が「ゑん」となっている。

中門は五平（長方形）柱の棟門に描かれ、北側に潜り戸がみられる。

②天龍寺蔵「銀閣寺指図」　18世紀中頃

境内全体図。建物は単線引、柱位置記入。各室の広さが書かれ、総門から中門へ至る参道には長さの記入がある。客殿の西側が現状と同じく２室に描かれるなど、諸建物の変遷等から①、③の古図の中間で18世紀中頃のものと推測される。

中門は五平（長方形）の本柱と控柱が描かれるが、棟門か薬医門かは不明である。①同様北側に潜り戸がみられる。

③慈照寺蔵「総境内坪数並諸建物之絵図」寛政年間（18世紀後期）

図中の貼札に「寛政二年改之」と「文化十一年改之」の二種がみられる

境内全体図。建物は単線引、彩色。

中門は向唐門形式のものが起し絵で描かれているが、その下には「薬醫門」と書かれる。

④慈照寺蔵「東山慈照禅寺総建物並庭之図形　荒木元進筆之　嘉永四年辛亥初秋」

嘉永四年（1851）

境内全体図。二重線引、壁は塗り潰し。

中門も二重線で描かれるが、形状・規模からみても現在の門であろうと思われる。

その他にも江戸中期以降の慈照寺境内図（京都歴史資料館所蔵）や天明年間総絵図（相国寺所蔵）東山慈照寺惣指図（京都府立資料館蔵）等が残る。

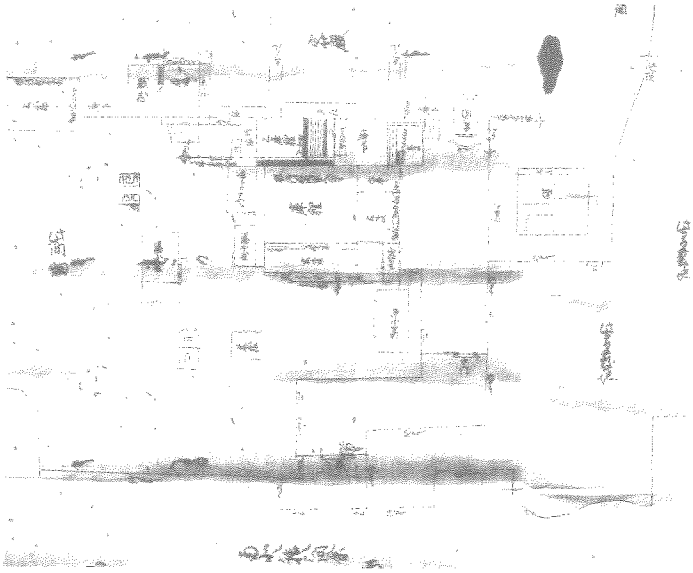
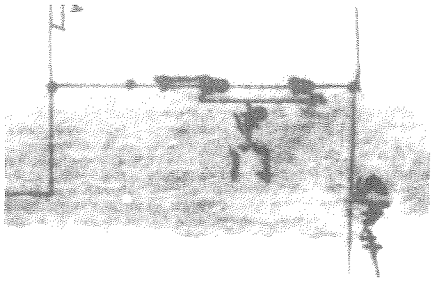


図１－１（左）
①文部科学省国文学研究資料館蔵
山城国葛野郡嵯峨天龍寺塔頭臨川寺文書の内「東山慈照寺修復許可ニ付大工市左衛門伺状」
元文三年（1738）午四月

図１－２（下）　同左（部分）
五平（長方形）の本柱２本と左側には潜り戸が描かれる



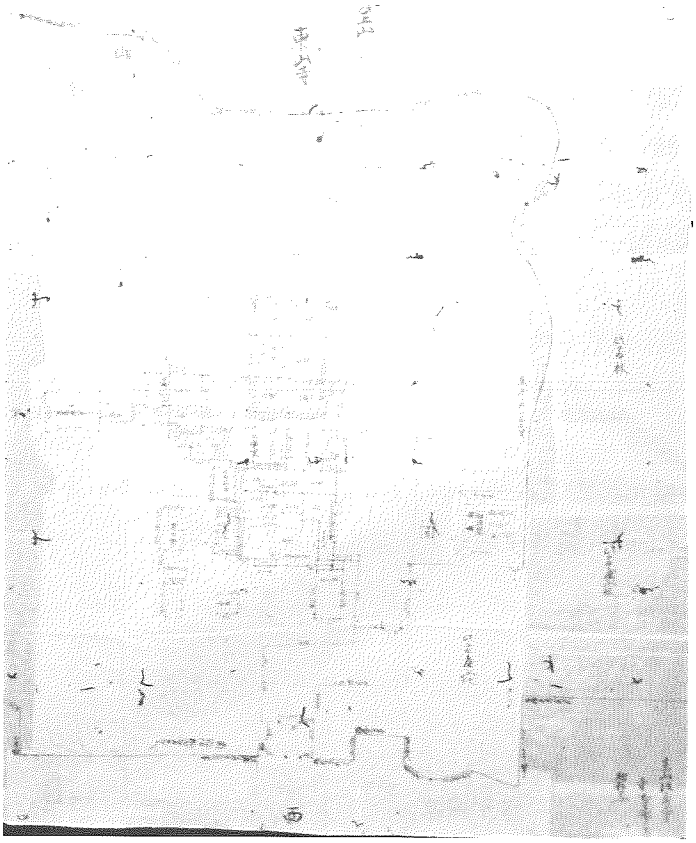
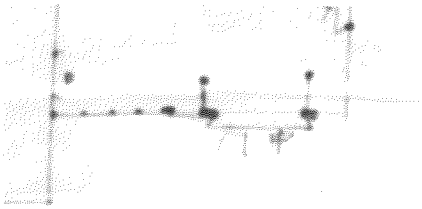


図２－１（左）
②天龍寺蔵「銀閣寺指図」
18世紀中頃

図２－２（下）　同左（部分）
五平の本柱２本と控柱２本、左側には潜り戸が描かれる



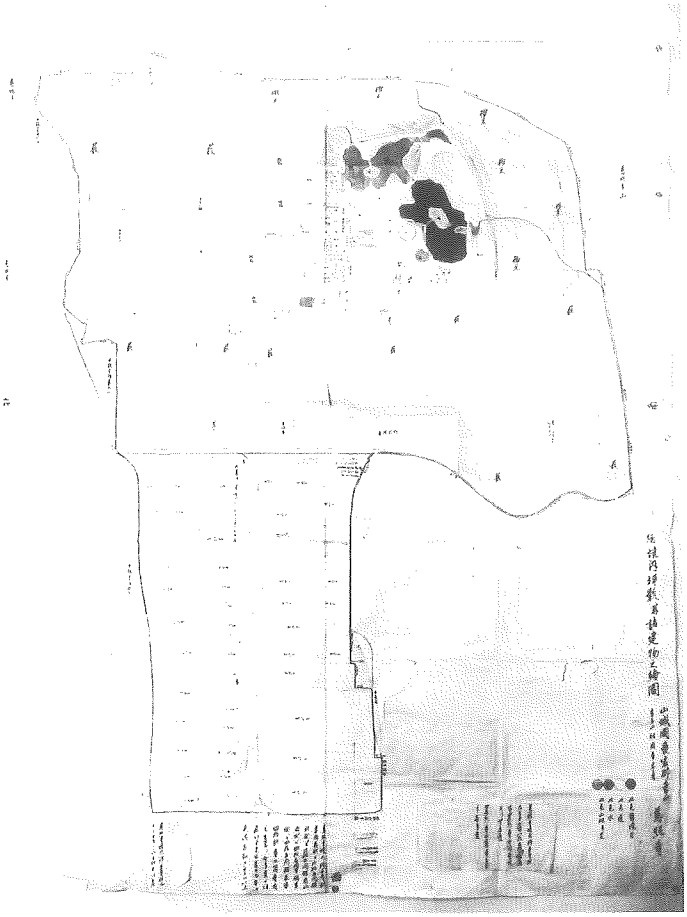


図３－１（左）
③慈照寺蔵
「総境内坪数並諸建物之絵図」
寛政年間（18世紀後期）
図中の貼札に「寛政二年改之」と「文化十一年改之」の二種がみられる

図３－２（下）　同左（部分）
向唐門の起し絵が描かれるが、その下には薬醫門と書かれる

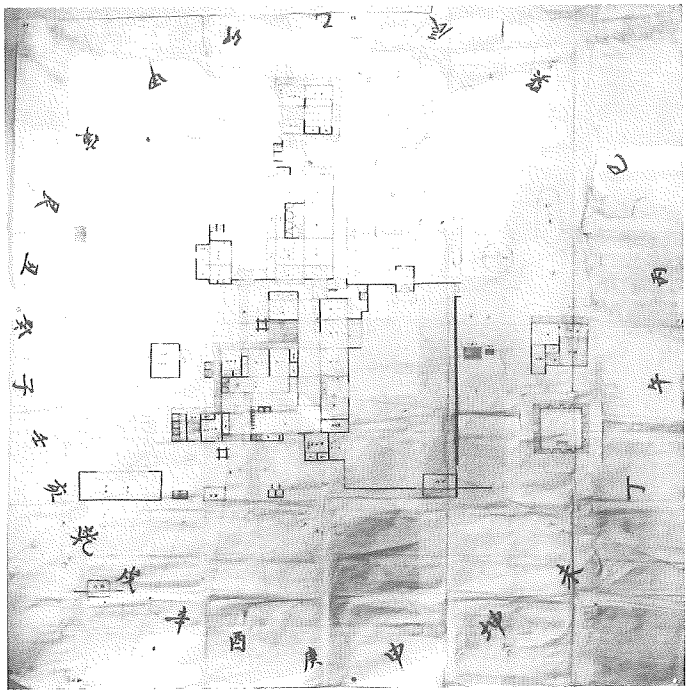
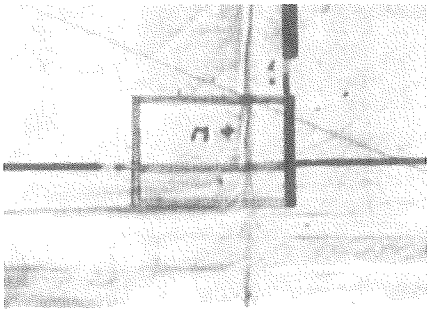


図４－１（左）
④慈照寺蔵
「東山慈照禅寺総建物並庭之図形
荒木元進筆之　嘉永四年辛亥初秋」
嘉永四年（1851）

図４－２（下）　同左（部分）



## 5．発掘調査の内容

発掘調査は平成15年３月から㈶京都市埋蔵文化財研究所によって行われ、江戸時代後期以降、江戸時代初期、室町時代前期以降の各遺構を検出した。調査の概要は同研究所の調査概報2003-1「史跡慈照寺（銀閣寺）旧境内」（2003年）に報告されている。

Ⅰ　江戸時代後期以降

今回解体された中門（薬医門形式）の基壇が構築されたのは江戸時代後期と考えられる。基壇の外装（四半敷敷石）などは後世に部分的、あるいは全面的に改修されたものとみられるが、薬医門の親柱および控柱の礎石は江戸時代後期に据えられたと思われる。

Ⅱ　江戸時代初期

南北方向の礎石列01（柱間南から1.2m・3.0m）と、この南端の礎石に直行して取り付く東西方向の礎石列02（柱間東から1.2m・1.5m・1.2m）を検出した。礎石列01は先の薬医門形式の門に先行する門の親柱列の礎石と考えられ、控柱の痕跡は検出されなかった。よって、この頃は棟門形式であったと推測される。礎石列02は礎石列01の南端に取り付いて参道の南を限る築垣のようなものと考えられる。

Ⅲ　室町時代前期以降

西面する南北方向の石列（SX15）を検出した。SX15の方向は北寄りで西に15度程度振っていて、現在の建物や江戸時代の遺構の方位とは異なっている。この地域には、室町時代には現在の方位とは異なる約N15°Wの方位の地割りがあったものと考えられる。出土遺物の年代観などからも東山殿に関連する遺構である可能性が高いと考えられる。また、SX15の下層には石垣状の遺構があることが部分的に確認できており、さらに古い時期の遺構が遺存している。

写真２　江戸時代後期　中門（薬医門）
礎石据付け状況（北西から）

写真３　江戸時代初期　礎石列01・02
（北西から）

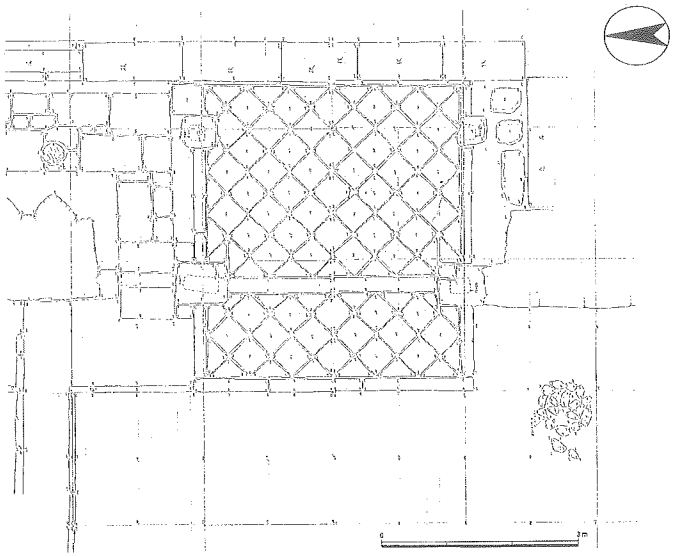


図5
江戸時代後期以降　遺構平面図（薬医門基壇）
発掘調査実施前の解体された中門の礎石と敷石の状況を示す平面図。

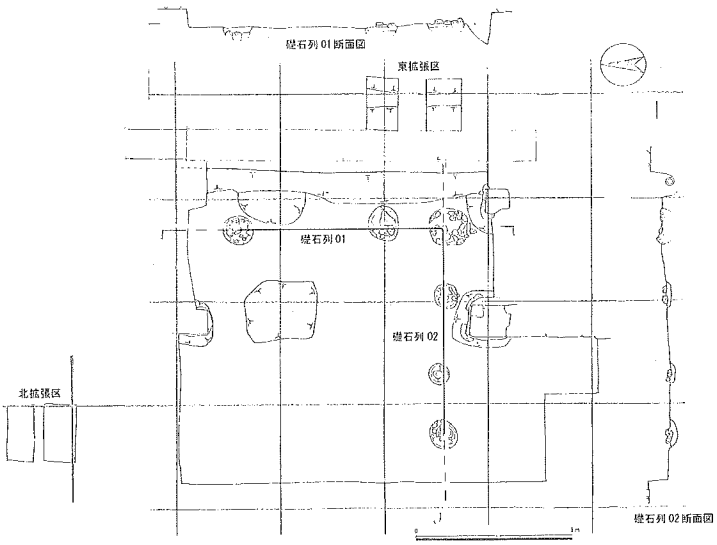



図6
江戸時代初期　遺構図（礎石列01・02）
江戸時代後期に造立された中門の柱礎石、敷石等を撤去し、江戸時代初期頃の先行の門の遺構と考えられる礎石列01とそれと直行する礎石列02を検出した。東に拡張区を設けて東控柱の痕跡を探ったが存在しなかった。

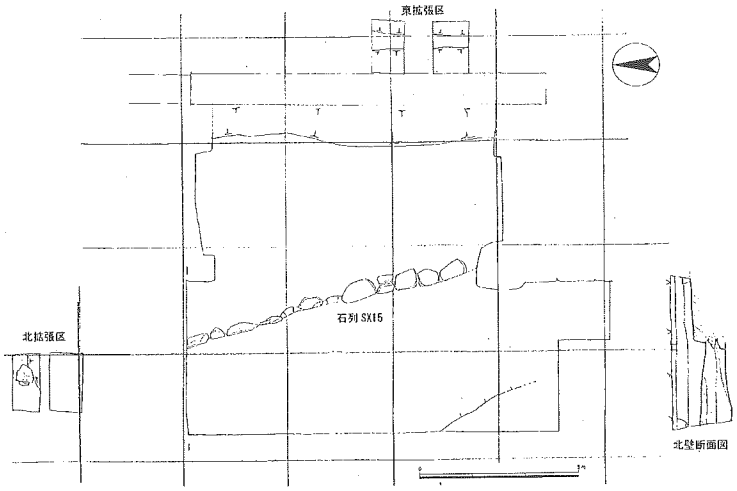



図7
室町時代前期以降　遺構図（石列SX15）
南北石列SX15を検出した。この主軸は北で西へ15度程度偏しており、その南端は江戸時代江戸時代後期の中門南親柱礎石で壊されている。

## 6．様式の検討

以上、古図と発掘調査の成果を照らし合わせてみると、中門近辺は室町時代には現在と方位の異なる地割りの築石があり、江戸初期になり間口約３mの棟門が建てられ、その後薬医門に改築されたと考えられる。今回の改築には以下の案を作成し、それぞれの案について検討することとした。

①薬医門案

現在と同じ薬医門形式で間口を４mで本瓦葺きとし、江戸中期頃の類例を参考にしたもの。

②向唐門案

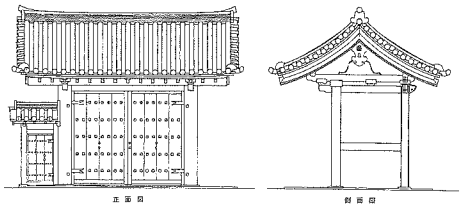
寛政の古図を参考に向唐門で間口を４mとし、檜皮葺きとしたもの。

③棟門案Ａ（五平柱　本瓦葺き）

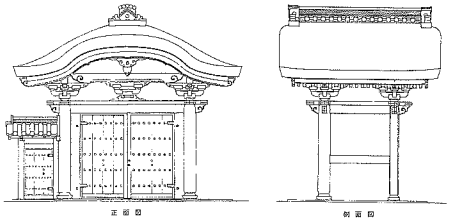
江戸時代初期の遺構と古図に基づき五平柱で間口３mとし、本瓦葺きとしたもの。

④棟門案Ｂ（円柱　檜皮葺き）

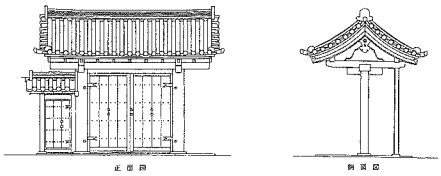
発掘調査の結果に基づき間口を３mでとし、禅宗様、檜皮葺きで室町時代の様式としたもの。



①薬医門案



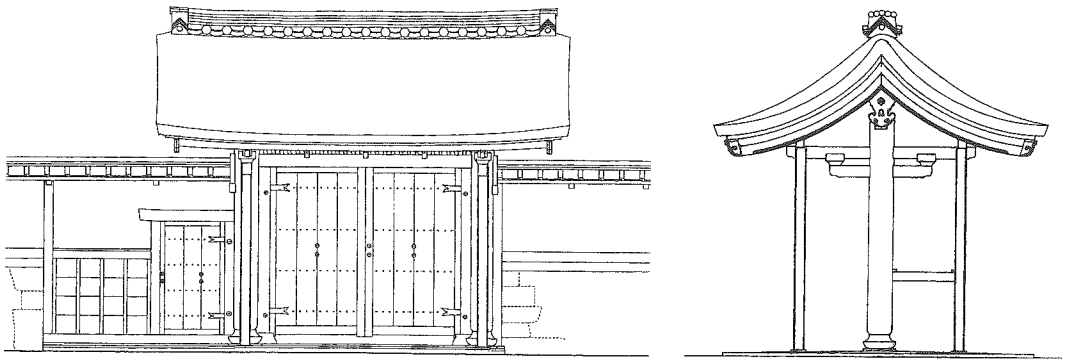
②向唐門案



③棟門案Ａ

図８　各案立面図

以上の案について検討を行った結果、発掘調査の成果を踏まえ間口を３mとし、境内の景観を配慮した④棟門案Ｂが採用された。また、基礎部分の設計にあたっては遺構面の保護に配慮した。



正面図　　側面図

図９　実施立面図（④棟門案Ｂ）

## 7．配置の検討

解体前の中門周辺は、中門の北側には潜り戸を設け、両脇は高さ約１mの石垣があり、南側の石垣の上には漆喰壁の塀、北側は竹垣が建て込まれていた。また、門の北西に受付、南東に売店があり、改札は門の軒内に取り込まれていたため建具は開閉ができない状態となっていた。(写真1)

発掘調査で検出された江戸初期の中門と推定される柱位置は解体前よりも東に約1.8m寄ったところにあり、現在とは位置が異なることが判明した。なお、南北方向の礎石列01の南から1.2m・3.0mと並ぶ柱間や、礎石列02の軸線は、古図①～③に描かれている中門とその南の脇塀及び東西に延びる垣と一致している。

今回の計画では間口３mの禅宗様棟門を採用することとしたが、礎石列01に則った位置での復元は中門両脇の石垣など周辺の改変が大がかりなものとなり、かつ拝観者の動線の確保が困難となるため、解体前の位置を基本とした２案について検討を行った。CASE１は中門を石垣の中央に配し、解体前同様南側は漆喰塀、北側を竹垣としたもの、CASE２は門を南石垣に寄せ、両脇とも漆喰塀としたものである。検討の結果、ほぼCASE２に準じることとなったが、中門の南本柱を東側にある土塀の貝型柱筋に揃え、本柱と石垣の間に生じた隙間には石を補足するなど、中門正面から望む庫裡前庭の景観や、拝観者の動線を配慮した計画とした。また、受付は解体前と同位置に、改札は門の後ろで正面からはできるだけ見えない位置に配置した。

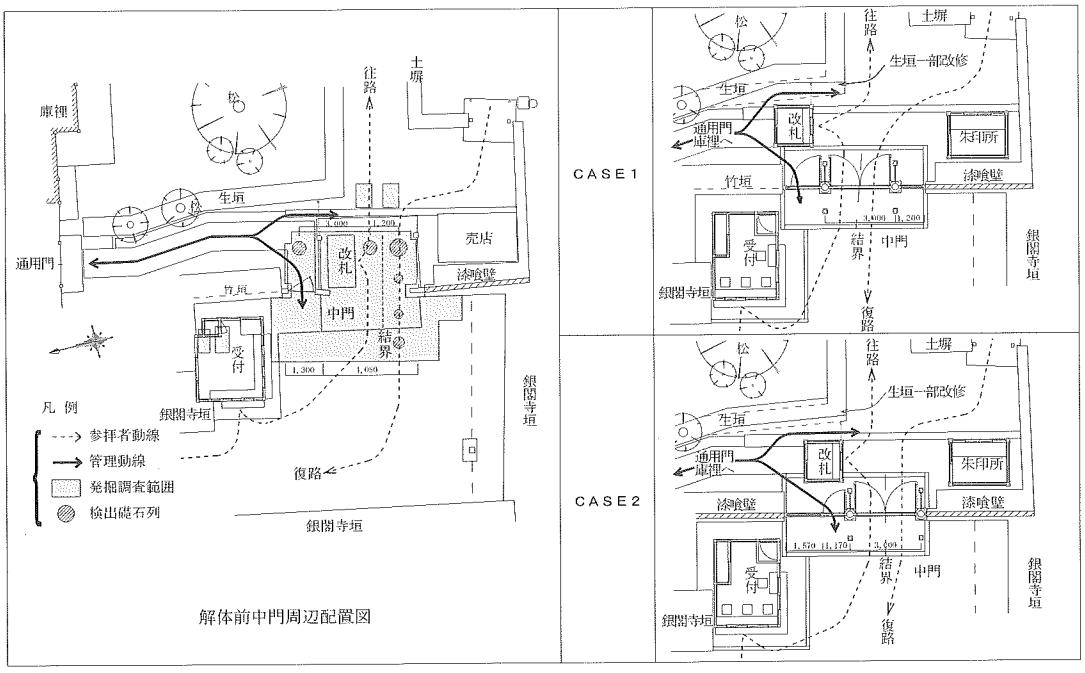



図10　中門配置計画図

## 8．工事関係者

この度の工事では多くの職方の協力を得たが、ここに主な関係者の名前を記す。

総合請負・木工事　(株)北村誠工務店

| | | | |
|---|---|---|---|
| 基礎工事 | 前田工業 | 石工事 | (株)芳村石材店 |
| 檜皮葺工事 | (有)宮川屋根工業 | 瓦屋根工事 | (株)寺本甚兵衛製瓦 |
| 板金工事 | 田中板金 | 建具工事 | 大谷建具工房 |
| 左官工事 | 土橋左官店 | 金具工事 | モリモト社寺工芸社 |
| 仮設工事 | (株)渕上組 | 電気工事 | 波多野電機 |
| 給排水工事 | (有)丸水設備工業 | 庭園工事 | 樋口造園(株) |
| 石垣修復工事 | 植恒 | | |

## 9．工事工程

- 旧中門解体　平成15年２月４日
- 発掘調査　平成15年３月４日
- 起工式　平成15年11月27日
- 着工　平成15年12月１日
- 棟上式　平成16年４月17日
- 竣工　平成16年６月６日
- 落慶法要　平成16年６月７日

## 10．おわりに

中門改築に関する委員会は平成14年１月から平成15年９月までの１年半と長期に亘った。その間各委員の先生方をはじめ、慈照寺、文化庁、京都府、京都市、㈶京都市埋蔵文化財研究所の各関係者には終始ご指導、ご助言を頂いた。また、施工を担当した北村誠工務店を始めとする各関係業者には多大なご協力を頂いた。ここに改めて深く謝意を表します。また、古図の掲載に対しては文部科学省国文学研究資料館、慈照寺、天龍寺に、発掘調査の成果は㈶京都市埋蔵文化財研究所にそれぞれ許可を頂いた。ここに、重ねてお礼を申し上げる。

注１）　京都府教育委員会「京都府の近世社寺建築」1983

注２）　収蔵されてきたものは慈照寺文書として京都市歴史資料館に387点が所蔵されている．

注３）　（注２）文書群の中に寛政11年、中門南の土塀改修の願書がみられる．